

瑞溪周鳳の『刻楮集』について

伊  
藤  
東  
慎

『刻楮集』の存失	一八三
阿足院藏『刻楮』について	一八五
『刻楮集』筆録者瑞溪周鳳と同書からの抄出者天隱竜沢	一九二
『刻楮集』の成立とその資料的価値	一九三
天隱竜沢の抄出とその後の伝写	一九六
垢穢集	一九九
阿足院藏『刻楮』抄出書名一覧表	二〇二

## 『刻楮集』の存失

室町時代中期の禅僧、相国寺の瑞溪周鳳が群書を渉獵抜粹した『刻楮集』という二百卷の巨冊があったと伝えられる。ところが現在は一二の零本が諸所に散在するだけで、あとは散失してしまったと考えられている。たとえば『新纂禅籍目録』には、成實堂文庫所収の一冊本をあげるだけである。『刻楮集』については、江戸時代末期の建仁寺両足院の高峰東暎が、『靈松一枝』二巻という米西禅師伝記蒐録書の卷上に

瑞溪の刻楮集に日工集第九を引いて曰く、泉涌開山我<sup>俊為、</sup>禪法師は、仍ち建仁開山の小師なり。伝聞す、建仁開山死に臨んで遺誡す。我禪来るとき門を閉じて入ることをゆるすことを得ざれと。果して我禪預め知り梯を設けて入る。

と『刻楮集』所収の『日工集』を引用し、それに附記して次のように述べている。

暎曰く。日工略集を検するにこの語なし。瑞溪のみるところは、蓋し四十八卷の本ならんと瑞溪の『刻楮集』に引用された義堂周信の『日工略集』のこの部分は、流布本『空華日用工夫略集』には見られず、略集として抄録される以前の四十八卷本所収の文で、現在見ることできないところであると指摘している。さらに大正九年九月の『支那学』第一巻第一号に、当時両足院の住職だった佐賀東周師が『六通寺派の画家』という論文の中で

瑞溪に三十歳の後輩なる天隱竜沢の抄本なる刻楮集を見る事が出来た。足本ではないが依って以て刻楮の大概を知るには充分である。

とし、『刻楮集』に就いては稿を改めて紹介したいと約束されたが、翌年六月九日示寂のためか、その実現を見なかった。かつて玉村竹二氏はこのように両足院主が二人も『刻楮集』を見ていることに注意し、恐らく同院蔵本中に同書があるのではないかと、ほめかされた。<sup>(1)</sup> その両足院をいま守塔している私は、このことについて多少は心にかけて乍らも、性来の懶惰のため調査が延引して今日になってしまった。現在の両足院の蔵書目録は、佐賀師示寂後の大正十三年頃に作製されたもので、『刻楮集』の書名は載っていない。そのためにこれまでは存失不明であった。今夏偶、両足院の古い蔵書目録数種を発見し、その最も古い寛文四年（一六六四）雲外東竺編の目録から『刻楮集』発見の端緒を得た。同目録の「仏書之類」に

刻楮

五帙 五十四冊

内 木帙 十冊 火帙 九冊 土帙 十一冊

金帙 十一冊 水帙 十三冊

とある。これによると五帙にわかれた五十四冊の『刻楮集』が当時存在したことがわかる。そして書庫の一隅に、この各種の帙名を朱書した数十冊の写本が帙を失い、緒縄で一括されてあるのを知った。整理をすすめて行くと、この一群からわかれて独立の一書として、現目録に記入されているもののあることもわかった。それらの独立書をこの一群へもどすと次のようになる。

「木」十冊 「火」九冊 「金」十一冊 「水」十三冊

合計四十三冊が現存し、「土」帙十三冊は遂に一冊も発見することができなかった。寛文四年に五帙にわかれ五十四冊あった『刻楮集』がどういう理由でか、前記のように「土」帙全巻を失ったとはいえ、ほかの帙に属する全巻が残っていたことは、この上もない喜びであった。

(1) 玉村竹二氏『歴史地理』第七十四巻第五・六号 空華日工集考(上・下)——別抄本及び略集異本に就いて——(上)参照

## 両足院蔵『刻楮』について

両足院蔵『刻楮』は瑞溪周鳳の『刻楮集』から天隠竜沢が抄出したものであるという、佐賀東周師の指摘は「金」第十の「刻楮集目錄」の下にある「朱点黙雲所享」という注記によるものだろう。ここに黙雲というのは天隠竜沢の別称であることはいくまでもない。しかし後に述べるように、これらのすべてが『刻楮集』からの天隠所抄のものであるとはいえない。天隠自身が原本から抄出したと思われる部分、天隠の寂後、法縁のあるものが追補したと認められる部分を含むからである。

本文の筆跡は一筆でなく数筆から成っている。筆写時代についての確証はないが、大部分は江戸時代以前と考えられる。まず本書の体裁を検べて見よう。本文墨付は少い冊で九紙、最も多い冊で五十四紙、半葉十五行内外、毎

行廿五字内外と一定していない。表紙は各冊とも本文とは別人の加筆がある。左中央に「木」「火」「金」「水」の帙名が前記のように朱書されている。いま「木」第一を例に取ると、左端に普灯・夾注補教篇・鐔津文集と抄出書名を表示し、その下に「木」と朱書し、続いて「第一」、左下に「仁十冊之内」とある。この「仁十冊之内」というのは「木」帙だけに記されている。この帙はもと二十冊あったが、雲外東竺の時代には、そのうち七冊がなくなり十三冊に減っていたことを示すものだろう。書名は左上とばかりに限らず、右上に書かれている場合もある。綴目に「第七」とあるのは整理の結果、雲外東竺時代にあった『刻楮』の巻数第一から第五十四迄の整理番号のようである。散佚した「土」帙十一冊発見の手がかりに、帙別番号と綴目番号とを対比しておこう。

		綴目番号	帙別番号
／	32	／	1
木 6	33	／	5
／	34	水1A	6
／	35	木 1	7
金 4	36	木 2	8
水 6	37	水 2	9
水 8	38	木 3	10
金 5	39	水 3	11
／	40	木 4	12
金 6	41	木 5	13
金 1	42	／	14
金 8	43	火 2	15上
木 8	44	火 3	15下
木 7	45	火 4	16
木 9	46	金 1	17
火10	47	／	18
／	48	金 2	19
金 9	49	／	20
金11	50	水 4	21
木10	51	／	22
水10?	52	火 5	23
水 9?	53	火 6	24
金10	54	／	25
		水 7	26
		／	27
		火 9	28
		火 8	29
		金 3	30
		水 B	31

「水」1Bには綴目番号なく、「火」一、「水」Aの綴目番号は破損のため判明しない。

書名や帙別番号などの書き方は各巻共通であるが、表紙やその裏にその冊に関係する要文や語句等の跋粹を記す

ものもある。本文と異なり後人の加筆である。

「朱点は天隠の写すところ」という刻楮集目録は次の通りである。朱勾が巻次または書名の右肩に施されているが、いま頭部に○印を附して代用しておく。

刻楮集目録 朱点黙雲所写(朱書)

一 空東山―已上四十二人録。見天章閑東集。

二 牧溪 (榜) 棱殿義海

三 詩話総亀 淮南子 蘿山集 江文通文集 潜溪集

○四 ○五 ○六 ○七太平広記 ○八同 九 ○十 ○十一 十二 ○十三類説 ○十四同 十五 同類説  
失却 ○十六

大蔵一 ○十七 鶴林玉露

十八 海録碎事 ○十九 劍南統藁 画慢集 楊誠齋 修真十書

○二十 皇朝文翰 閑居偏 (編) 退耕録 詩家昇鬱統藁 陳簡齋詩 玉海 南湖集序 子昂伝 牧溪伝

二十一 大蔵二 二十二 同三

○二十三 竹園散人夢語 康瓠集 会稽志 橘山四六 子昂行状 容齋三筆四筆 吳越春秋 唐人絶句集 世説新

語 新序 群書鈎玄 自警偏 (編) 漁樵対問 金明池事迹 二十四 二十五 二十六

○二十七 図絵宝鑑 清容居士集 牧闇先生集 諸子瑤林 本中 (章) 古今雜集 瑞岩寿禅師録

○二十八 穎浜文集

- 二十九 唐書 三十 同
- 三十二 容齋統筆五筆
- 三十五 普門品釈 観音經義疏
- 三十八 大藏五
- 四十 宣和画譜 入蜀記 半 南山行藁 又玄集
- 四十一 大藏六 ○金山志
- 四十二 東坡別集
- 四十三 宋広平梅花賦 瑣碎録 柳待制集 玩易齋詩集 清涼伝序
- 四十四 大藏七
- 四十七 東山外集抄
- 四十八 漢書
- 五十 湖隠録 法住記 耆域因伝 古今詩林
- 五十一 筆削記 掌中樞要 文句并疏記
- 五十二 法華合論 搜神記 柘軒先生 金湯編 博陵王問答抄 稽古略 日本書 中岩述
- 五十三 柳抄 五十四同 五十五同
- 五十六 慈氏日工集



五十七 通論略抄

○五十八 元朝諸賢詩 葉室舍利相伝 泉涌寺舍利相伝 片岡達磨寺化疏 大明皇陵碑 日本地藏感応記 大黒經

大昌無之(朱書) 十八羅漢贊 古今雜詠物集 批点古文 聖福寺仏殿記

六十一 江湖集抄 勝剛私記 付派侍者

○六十二 大明諸禪刹位次 本朝禪院諸山座位

七十 梵網古迹私抄 五教章私抄

七十二 容齋隨筆 中峯広録并抄

七十三 心経私記 百法問答抄私記

七十四 棱嚴義海<sup>(抄)</sup> 七十五同 七十六同 七十八同 七十九同

八十一 杜詩抄 八十二同

八十四 柳文口義 八十五同 八十六同 八十七同 八十八同 八十九同

九十一 釈門正統 玄冥録

○九十五 文献通考

九十六 群書備考

○九十八 源家小伝 自等持院殿至今相公廿一歳清少納言撰也 大慧年譜 欣笑雲南遊日記

九十九 書史会要 愚溪業障藁

百 溪嵐拾葉集 ○百四 春渚紀聞自一至十

百七 漫温州志

百十 円覚集解

百十一 十二 十三 五教章抄

百十四 法華私記 碧岩私記 百十五 同

百十六 毛詩 左伝 文選

百廿一 普門品科注 如一菴就科注有増損

百廿九 紙衣膳

百三十一 法花伝 百三十二 同

百三十六 蒲室疏抄 天英撰

百四十六 山谷詩私抄 百四十六 百四十七 百四十八 百四十九 百五十同

百五十一 法華緣釈上 百五十二 百五十三 百五十八

百五十九 百川学海

右の目録の中、「四十一」の巻次に朱勾がなく、列記された書名のうち『金山志』に印のあるのは、第四十一巻の全巻は写さないが、その一部である『金山志』を写したという意味だろう。天隱が『刻楮集』から書写したのは二十六巻(うち一巻はその一部だが)であるが、その凡てが両足院蔵『刻楮』の中に残っているのではない。また残

ついてもこの目録通りの書名が一卷にまとめられたものは殆どない。天隱は『刻楮集』から必要な部分を抄出して、もとの巻次には関係なく各冊をまとめたものらしい。本稿末尾に両足院藏『刻楮』の抄出書名一覧表を附しておくから、彼此参照ありたい。比較的内容が近いのは「火」九と『刻楮集』第二十三巻とである。カッコ内の数字は『刻楮集』の巻次、×印は巻次不明。

千家辞苑× 康瓠集(23) 橘山四六(23) 唐人絶句集(23) 吳越春秋(23) 世説新語(23) 新序(23) 竹園散人文(23) 清容居士集(27) 冰玉堂記× 詩人香韻× 松卿集× 博聞錄× 記纂淵海× 三山志×

これによって天隱が『刻楮集』から抄出する態度がうかがわれる。自らの利用に供するのが目的で、『刻楮集』の原形をそのまま伝えようという点には余り関心がなかったといえる。

この目録に従えば『刻楮集』は第一巻にはじまり、第五百十九巻で終っている。そのうち巻数を示すものの九十七(第百四十六は重出しているが)、巻数を示さないもの六十二巻あるのはどういうわけであろうか。尤も瑞溪在世のとき、その一部を失っていたことは後に詳述するが、六十余巻も失っていたとは到底考えられない。『臥雲日件錄拔尤』(以下『拔尤』と略称す)に十数回『刻楮集』又は『楮』の略称で引用されているが、巻次のわかるのは九巻ある。そのうち七巻はこの目録にもあるが、第六十巻と第百四十巻とは『拔尤』にあるから、両巻は天隱のときには存在した筈であるが載せていない。従って天隱の書写した刻楮集目録における六十余巻の脱漏は、そのときその全部が存在しなかったのではなからう。

巻次だけでなく書名の記入でも、省略の個所が見受けられる。『拔尤』文明二年三月表紙書入の「四要品、有四

方便」の注に「綵尺 楮百五十六」とあるが天隱所引の目録には

百五十一 法華綵釈上 百五十二 百五十三 百五十八

とある。第百五十四卷乃至第百五十七卷を脱漏しているうち、少くとも第百五十六卷は法華綵釈で、恐らく第百五十一卷乃至第百五十六卷までは同書であったであろう。

### 『刻楮集』筆録者瑞溪周鳳と同書からの抄出者天隱竜沢

『刻楮集』の筆録者、法諱は周鳳、道号は瑞溪、別号を臥雲山人・刻楮子・竹卿子・獐羊僧、地名を泉南という。明徳三年十二月八日和泉の堺の生れで、夢窓派無求周伸の法嗣である。詩文に堪能で外学にも通じ、当時学問文筆にたけた敵中周噩・惟肖得巖・天章澄叅・江西竜派等に従学し、かれらから深い影響を受けた。学問的に傑出していた上、前後三回鹿苑僧録に任ぜられ、宗政の手腕も高く買われていた。遺稿も多く日記録の『臥雲日件録』、故事の考証解説書の『臥雲夢語集』、蘇東坡詩の注釈書『脛説』二十五卷、外交文書の作例集『善隣国宝記』三卷、詩集『臥雲稿』、四六文集『竹卿集』、群書の抄録『刻楮集』二百卷等がある。文明五年五月八日洛北北岩藏慈雲庵で八十三歳を以て示寂し、のち興宗明教禪師と諡された。また相国寺の寿星軒、無求周伸の塔所寿徳院（のち慶雲院と改名）、寿徳院内の寮舎、北禅軒、嵯峨の大慈庵に住したから、北禅・寿星と呼ばれることもある。

『刻楮集』からの抄出者天隱、法諱は竜沢、黙雲と号し播磨の生れ。一山派の天柱竜済の法嗣で、建仁・南禅に

歴住し建仁寺大昌院に止住した。雲章一慶・正宗竜統等に外学を受け、著作に『翠竹真如集』『默雲稿』『錦繡段抄』などがある。明応九年九月二十三日示寂した。

### 『刻楮集』の成立とその資料的価値

本書は群書からの抜粹であるから、その基くところの原本が現存すれば、資料としての価値は高くない。ところがその抜粹の内容により、当時の五山僧の関心がどのような傾向にあるかを知るには好適の資料である。すなわち当時の五山僧が禅的体验を根底として、文芸的要素を培養する補給源をここに見出すことができる。もう一つの価値がある。この抄録の中に、当時は存在したが現在は見ることのできない史料があるときは、貴重な存在といわなければならない。前述の四十八巻本の『日工集』の引用などその好例である。また本書が伝写されるにつれ記入された注や識語にも、捨てがたい史料価値のあることを看過してはならない。

もともとこうした抜粹書は自らの利用のために作成されるものである。瑞溪は『刻楮集』について自ら「群書中の要を抄するものなり」（『抜尤』寛正五年八月廿一日条）といい、『興宗明教禅師行状』には更に詳しく製作の過程とその内容を説明し

上略又刻楮子と号す。刻楮集二百巻あり。四方の書読まざるはなし。読めば則ち抄せざるはなし。所謂二百巻これなり。大蔵經七千巻、刻楮内にあるもの、わずかに七冊なり。則ち読むところの書あげて数ふべからず。

と。瑞溪抄録の『刻楮集』の巻数二百巻というのは、これに基いている。前記天隱書写の目録は第百五十九巻を以て終っているから、或いは二百巻というのは概数をあげたのかも知れない。次にこの行状の撰者は、大藏經からの抄録の少いことに不満の意を漏らしている。当時の五山僧の藏經への関心は浅くはないが、それよりも禪録、中国の文学思想等への探求が強く、これらが五山文学の雰囲気醸し出していた。更に

年七十七。耳目未だ衰へず。禪定の暇、抄書作文この道を發揮す

と、瑞溪が老齡にもかかわらず抄録に孜孜として倦まなかった様子を伝えている。かれのこうした努力は、自己の利用のためばかりでなく、他人の用に供するためでもあった。彼に先立って示寂した弟子の綿谷周麿の行状を綴り乍ら、八十二歳のかれは次のように述懐している。

予曾って書を読みば一二を抄し、これに名づくるに刻楮集を以てす。予抄する所のもの亦これを抄す。然もよくその要を節す。細字楷書便ち自ら校雠し、人をして観覽に便ならしむ(『綿谷庵禪師行状』)

と、簡明な楷書体に書き改め、更に原本と対照校訂を行ない、他人のために読みやすくするという配慮があった。当時五山屈指の学僧瑞溪の抄録本であるから、のち天隱竜沢などによって書写利用されたのも、尤もなことで首肯される。またかなり広い範囲に権威ある抄録書として珍重がられていたようである。惟高妙安の『玉塵抄』に<sup>(2)</sup>

大藏經五千四十八卷ヲ五千四八トシタソ。横川玄竜文ニ五千四八トカケタソ。松卿文集ト云書アリ。北禪ノ刻楮ノ中ニアリ 藏經ノ一疏ニカイタソ 東福禪南ノ彭叔仙和上五千四八ト切タソ(二十一42オ)

とある。北禪は相国寺寿徳院内の瑞溪の寮舎、北禪軒からくる瑞溪の別称である。当時の講説の中に『刻楮』所

引の書が孫引された一例である。

瑞溪は他人の書籍を借覽するときは、なるべく早く返却するために、門生などに手分けして抄出させた。このため各冊がばらばらになり、折角書写し乍らその一部を失うという事態さえ起している。前掲の『綿谷庵禪師行狀』の文に続いて

予また他書を借り久しくすべからず。則ちこれを分け各抄す。各抄すること陸放翁入蜀記の如く是なり。刻楮集中に見ゆ。今各その半を欠く。

とある。天隱書写の刻楮集目録の「四十」の項に『入蜀記』の右下にやや小さく「半」の文字の記されてあるのは、手分けて書写したためにその一半を失ったという、かれの言葉と符合する。なお「十五」項下の<sup>同類説</sup>失却といふ割注も、瑞溪のときか天隱書写のときかは不明だが、逸失していたことを示している。こうして見ると天隱が書写したときは『刻楮集』にかなりの欠本があったと想像される。

- (1) 玉村竹二氏の前掲の論文は、『日工集』『刻楮』の一群から独立して両足院目録に記載されていたときの所論であるが、綿密周到な研究であり、更に『日工集』に続いて収録されている『摩訶師子吼集』にふれ、大有有諸の『師子吼集』であると論断し、詩文集と考えられていたが、見聞録であると紹介されている。

- (2) 柳田征司氏『国語国文』一九六八年第三十七卷第九号、市立米沢図書館蔵「詩学大成抄」(「詩淵一滴」)に就いて

## 天隱竜沢の抄出とその後の伝写

前掲の両足院藏『刻楮』についての再説として、天隱の抄出とその後の伝写について眺めて見よう。いま明らかに『刻楮集』から抄出されたと見られるものに「水」五と九がある。「水」九の第一紙右上に「大藏一」、その下に「刻楮十六」とあり、「水」五の第一紙右上に「大藏一」次に「拾遺」として要語の抜粹ののち、華嚴・涅槃両經を抄出している。この「水」九に続くものが「水」五で、もとは一冊であり『刻楮集』第十六に相当することになり、天隱所引の刻楮集目録の「十六」の項下に「大藏一」とあるのと符合する。そして「水」五の本文二十九紙、同九の三十一紙合せて六十紙が『刻楮集』の一冊分の分量と想像される。なお「水」五の華嚴經の部の末尾に

長享二年孟夏單六抄了

涅槃經の部の末尾に

長享二年四月初七抄了

として華嚴・涅槃兩經の部を二日間で写し終ったと記している。この巻の中にある高麗藏華嚴經の卷末刊記の右に「建仁寺藏殿有之」、高麗藏經涅槃經卷末刊記の右下に「建仁大藏有之」とし、長祿二年（一四五八）高麗へ藏經請來に赴いた雪岩永嵩らによってもたらされた高麗藏經が、建仁寺の經藏に収められてから、三十年程しかたない目新しい事実なので特に注記している。『刻楮』という明記はないが、瑞溪の抄録と天隱の抄出の期日を示すもの



に「金」五の第十五紙右『太平御覧』抄録後の次の識語がある。

本云。享徳三年甲戌正月十六日。至黄昏終之。

長享三年己酉二月四日写之畢

天隱所引の目録にはこの書名は見当らないので、『刻楮集』の何れの巻に相当するか明らかでない。更に「水」第十の第九紙左『円悟心要』の末尾の次の識語も瑞溪の抄出を伝えている。

本云。応仁三年己丑六月廿九日。書于慧日北窓。<sup>(寛)</sup>明応八祀仲秋初三写之

この中の慧日というのは東福寺の山号で、同寺は瑞溪に取って余り法縁の深い方でないから奇異に思われないこともない。しかし勝剛長柔から『梅野的聞』を借覧抄写したり、『尤拔』宝徳二年正月五日条、海蔵門下の僧から『済北集』を借用する(『綿谷庵禪師行状』)など、学問的交渉は緊密であったといえる。<sup>(山)</sup>

このほか注記によって天隱が『刻楮集』から抄出したことのわかるのは、「金」十、「水」B等である。

天隱は『刻楮集』から書写するだけでなく、かれ自ら抜粹して残している部分がある。「木」十の『南堂録』末尾の

明応六年丁巳<sup>(寛)</sup>莫秋涉獵畢矣

という識語は、時代的に言って瑞溪ではなく、天隱と見なければならぬ。また「木」四の第廿紙右『続灯録』の項に

始於文明癸卯仲冬下浣。終於明季孟陬十日。

その巻末の第廿九紙左に

始于文之十五腊月<sup>(籍)</sup>上浣。终于明季孟春下浣

という識語も天隠の抄録を示している。前の識語では文明十五年十一月下旬に始め、翌年正月十日に終わったとい、後の識語では少し遅れて文明十五年の十二月上旬に始めて、明年一月下旬に終わったと繰り下っているのは、記憶の差異だろうか。いずれにしても五十日前後かかって自ら抄出しており、抄録本の書写でないことは確かである。このように天隠は『刻楮集』から抄出するとともに、自らもまた独自の立場から群書抜粹録を作っていたようである。即ち「木」二の『大慧普覚禪師年譜』の下に「默雲集暑字」、同『大宋国虚舟和尚法語』の下に「默雲暑字」「木」十の『雪岩和尚住潭州竜興禪寺語録』の下に、「默。称字五十五」『高峰原妙録』の下に、「默。称字五十五」とあるから、「暑」とか「称」という整理文字を使い少なくとも五十五巻あったことが知れる。

当時の五山僧には、仏教辞典、禅宗辞典、それに中国の文学・思想をはじめとする中国百科辞典というような性質の書物が必要とされた。文筆活動をするための基礎的な仕事として、地味にこれらの資料蒐集を行なったのが、瑞溪の抄録であり、天隠の『刻楮集』からの抄出と増補であったといえる。

ところで本書にある義堂の『日工集』は、天隠書写の刻楮集目録によると、天隠が書写していない部類にはいつている。同目録には確かに「五十六、慈氏日工集」とあるが、巻次にも書名にも、天隠書写を示す朱勾が施されていない。朱勾の脱漏でなければ、天隠以外の僧が抄出したと考えざるを得ない。

天隠最後の追補というのは、「木」九の「頑極号頌軸」の次の識語から言える。

現在大竜。永昌<sup>(正)</sup>三年丙寅仲秋單五写之

永正三年(一五〇六)は天隠の示寂後であるから、一山派の僧の加筆であることは疑いない。

以上を要約すると、兩足院藏『刻栳』は、①天隠が『刻栳集』から抄出したもの、②天隠以外の人が『刻栳集』から抄出したもの、③次項に述べるように天隠が『圻轆集』から写したもの、④天隠が直接原本から抄録したもの、⑤天隠寂後の追補を含んでいる。はじめは天隠の法系である一山派の僧に伝承されたが、いつの頃から判明しないが黄竜派の僧の手にうつり、寛文四年には五帙五十四冊あった。現在はそのうち「土」帙十一冊を欠き四十三冊になっている。

(1) 「水」九の『緇林宝訓』下にも「本云。書于慧日方丈」の注記がある。

## 圻 轆 集

次に本書の注記や表題に屢々出てくる圻轆集・轆線集とは、一体いかなる書で誰の撰述であろうか。轆は轆・襪に通じ、足袋の義、足袋は現今のように小鉤<sup>こはぎ</sup>でとめるのではなく、古くは絲で結んだものである。この足袋の紐を轆線といい、その紐は解いても長くはないから、特に長じた芸のないことをいう謙辭である。『太平広記』の「幹八座の芸、襪線を析<sup>は</sup>くが如し。一条の長きなし」の故事に由来するといわれる。圻は音タクまたはチャク、析・圻と

ともに「さく」の同義語に用いられる。従って圻轅集と轅線集は同一の書名と見てよく、抜粋書に名づけるには相応しい字句で、中国古典に精しい人の命名である。本書に出てくる該書の巻数と本書の帙番号と書名を表示すると次の通りである。『圻轅集』の文字を使う場合が多く、『轅線集』の文字を使ってある場合は△印で区別しておく。

圻轅集の巻次 書名(カッコ内は帙別番号)

- |    |            |           |                   |
|----|------------|-----------|-------------------|
| 1  | 容齋四筆(火9)   | 唐人絶句集(同)  | 呉越春秋(同)           |
| 11 | 千家辞苑(火9)   | 康瓠集(同)    |                   |
| 15 | 釈氏通鑑(水1A)  |           |                   |
| 18 | 泊川詩集(水2)   |           |                   |
| 21 | 程雪楼文集(火5)  | 方秋崖詩藁(火8) |                   |
| 23 | 予章文集(火1)   |           |                   |
| 27 | 三山志(火9)    |           |                   |
| 31 | 大藏經(宝積・大集) |           |                   |
| 33 | 唐書(金2)     |           |                   |
| 36 | 詩人膏馥(火9)   | 松郷集(同)    | 博聞録(同)            |
|    |            |           | 独菴外集統藁(水2)        |
|    |            |           | 蒲室集(同)            |
|    |            |           | 大歇和尚語録(同)         |
|    |            |           | 竺三元               |
|    |            |           | 録(同)              |
|    |            |           | 雪寶録(同)            |
|    |            |           | □□住滁州竜幡山寿聖禪寺語録(同) |
|    |            |           | 璨隠山扶宗集(同)         |
|    |            |           | 頭戒論(同)            |
| 41 | □菴録(水2)    | 天隠文集(水7)  |                   |

45 六学僧伝(水1B) 記纂淵海(火9)

52 橘山四六(火9)

▲巻次なし。△宗鏡録(木7表紙)。△大藏(月藏・大集)(木8表紙) (圻) 長慶集(水無番A表紙)

「火」五の『困学紀聞』について十紙程の抄録があり、更に「以下重写圻轍集」とあり、同一書に対して両様の抄出が行なわれている。「金」二には『圻轍集』第卅三として『唐書』の抄録があり、巻末に次の識語がある。

本云。応永三十四年三月晦日。寓居集雲中坊北軒抄書畢矣

長享元年歳在丁未十一月廿二日。大竜洞雲軒写之了。

『唐書』は天隠所引の目録によれば、『刻楮集』の第廿九・卅の両巻に当り、天隠の書写しない部類に属している。天隠は『唐書』を『刻楮集』によらず、応永三十四年(一四二七)抄録の『圻轍集』によって書写したことになる。応永三十四年といえは瑞溪の三十七歳のときに当り時代的には無理ではないが、同一人が同一書からの抜粹に對し、たとい内容が変っていたとしても、一方を『刻楮集』、他方を『圻轍集』と名づけることはまずあり得ない。瑞溪の同輩か先輩の書名ではあるまいか。ところが天隠が明らかに『刻楮集』から抄出した書名に、更に『圻轍集』の巻次を当てるのはどういうわけであろうか。本書「火」九で『刻楮集』二十三の『康弧集』、『橘山四六』、『唐人絶句集』等がその例である。瑞溪と同時代に、瑞溪同様の学僧の抄録書があったと考うべきであろうか。しばらく疑問のままにして考校を待ちたい。最後に両足院藏『刻楮』抄出書名一覧表をかかげておこう。

兩足院藏『刻楮』抄出書名一覽表

木帙 十冊

- ① 普灯(嘉泰普灯錄) 夾註輔教編 鐔津文集 本文21紙
  - ② 中峰広録 全室集 禅儀外文 藏叟摘藁 羅湖野録 感山雲臥紀談 無門関 大慧普覺禅師年譜 虚舟和尚法語 本文29紙
  - ③ 北磻文集 北磻詩集 本文21紙
  - ④ 隆興仏教編年通論 続灯録 藏経目錄 本文31紙
  - ⑤ 十三仏機縁 続僧宝伝 緇林宝訓 因師集賢語録 本文27紙
  - ⑥ 無文印 癡絶録 増集続伝灯録 平石録 庸菴前藁 横川録 本文34紙
  - ⑦ 宗鏡録 本文20紙
  - ⑧ 日藏経 月藏経 大集経 本文10紙
  - ⑨ 僧史略 大慧普覺禅師宗門武庫 無方禅師方外集 仏法金湯編 頑極号頌軸 本文10紙
  - ⑩ 南堂録 西巖和尚住平江府定慧禅寺語録 雪岩和尚住潭州竜興禅寺語録 高峰原妙録 普灯録 本文16紙
- 火帙 九冊
- ① 予章先生文集 山谷外集 本文22紙

② 万花谷 本文22紙

③ 万花谷 本文37紙

④ 万花谷 本文26紙

⑤ 困学紀聞 雜端集 本文27紙

⑥ 誠齋文集 本文54紙

⑦ 欠

⑧ 程雪樓文集 方秋崖詩藁 秋崖小藁 陳簡齋詩集 本文34紙

⑨ 千家辭苑 康瓠集 橘山四六 唐人絕句集 吳越春秋 世說新語 新序 竹圃散人文 清容居士集 冰玉堂記

詩人膏馥 松鄉集 博聞錄 記纂淵海 三山志 本文30紙

⑩ 後村居士集 本文31紙

土帙 欠(十一冊)

金帙 十一冊

① 通鑑 本文11紙

② 唐書 本文20紙

③ 古今合璧事類備要 風雅集 本文54紙

④ 古今源流至論 歐陽文集 本文17紙

⑤ 太平御覽 未斎小藁 寿禅師心賦 韻語陽秋 本文24紙

⑥ 鶴林玉露 本文31紙

⑦ 苕溪漁隱叢話 本文23紙

⑧ 方輿勝覽 本文44紙

⑨ 翰苑新書 宣話書譜 本文28紙

⑩ 五朝名臣言行錄 刻楮集目錄 東都事略列伝 約斎居士南湖集 韻語陽秋 事物紀原 宋學士文粹 新刊分類

江湖紀聞 本文31紙

⑪ 百川學海標目 続前定録 歐陽年譜 同帰田録 同詩話 同筆説 同試筆 本文20紙

水帙 十三冊

① 第一 A 仏祖統紀 釈氏通鑑 本文22紙

② 第一 B 六学僧伝 釈氏資鑑 増集続伝灯録 五灯会元 神僧伝 本文24紙

A B はもと一冊であつたもの。A の表紙に示す書名はA B 両巻を含む。B の表紙の書名の文字は雲外東竺筆と思はれる。このとき両巻となつたもの。

③ 第二 枯崖漫録 大光明蔵 月江録 橘州文集 率菴録 同外藁 続仏祖統紀 雪岩外集 大休和尚録 独菴録

退料雜語 独菴外集統藁 蒲室集 大歇和尚語録 竺元録 雪寶録 住滁州竜幡山寿聖禅院語録 今上皇

帝宣師奏対録 璨隠扶宗集 頭戒論 泊川詩集 虚堂録 本文34紙



- ④第三 日用工夫(空華日用工夫略集) 分門□類唐宋時賢千家詩選 唐詩鼓吹 摩訶師子吼集 本文22紙
- ⑤第四 大藏經(寶積・大集等) 本文39紙
- ⑥第五 大藏經(華嚴・涅槃經等) 本文29紙
- ⑦第六 如々居士錄 天隱文集 山菴雜錄 石門文集 本文49紙
- ⑧第七 劍南統藁 放翁詩集 渭南集 本文27紙
- ⑨第八 愚庵禪師四會語錄 人天寶鑑 芸窓四六 虛堂和尚錄 本文9紙
- ⑩第九 「大藏錄」 本文31紙
- ⑪第十 石帆語錄 海藏和尚紀年錄 緇林寶訓 無量壽禪師清規 法花戒環 大慧普說 釈門正統 禪林寶訓 末  
宗錄 本文36紙
- ⑫無番A 白氏文集 樊川文集 冷齋夜話 本文27紙
- ⑬無番B 義楚六帖 本文24紙

(昭和四十三年九月十日稿)